

第二言語教育とその教員養成において TBLT というアプローチが示唆すること  
ー応用言語学の貢献と日本語教育（学）の確立に向けてー

百濟正和（カーディフ大学、英国）

言語文化教育研究学会 特別企画：日本語教育討論会

“To teach, or not to teach, that is the question.”

1月21日（日曜日）@早稲田大学 11号館 606教室

討論会の背景：

- Processing Instruction (PI) を中心としたワークショップに筆者が招待発表を依頼され TBLT について概要を話した後に、そのワークショップに関連して Facebook 上でツイートした内容がきっかけ。
- そのツイートの意図するところは、主に2点。言語教育においてどうして文法・文型の指導への興味だけがいつまでも続くだろうか、そして、現在日本語教育で文法・文型中心から機能中心、特に Can-do statement (CDS) に興味が移っているが、それでも言語教育を実践していくには十分でないということ。
- そのツイートを見た今井新悟さん（筑波大学）からその意図するところの明確化を求められ、討論会の提案がなされた。

主な論点：

- 言語を文法・文型の単位で記述して積み上げても、実際のことばの実体にはならない。Can-do という単位も同様である。⇒ ソシユール的な言語観への懐疑がある。最近では、この考えを支えるバフチンの言語観が日本語教育において導入されている。（西口 2013、2015）
- ある関連領域（例えば Processing Instruction の場合は SLA）のみに依拠して言語教育の企画を行うことはできない。⇒ Research into Practice という考え方への懐疑。そして理論と実践の往還を通して得られる原理をもとにした教育実践（Principled language pedagogy）のすすめ。この考え方は、CLT の時代に Widdowson（1990）によって提示されている。

上記の論点を支える理論的背景ーTask-Based Language Teachingー：

- Tasks are a central element of language pedagogy（タスクは言語教育実践の中心的な要素である）（Bygate, Skehan, & Swain, 2001:1）

- TBLT lies at the nexus of theory, research, and pedagogy. (タスク中心の教授法は、理論と研究と教育実践の結合点となりうる。) (Adams, 2009:340)
- タスクが学習を主導するという考え方が TBLT で、何か文法・文型や Can-do が提示された後に、その学習をサポートするためにタスクを導入する Task-Supported Language Teaching と区別できる。(R. Ellis 2003, Samuda and Bygate 2008)
- One powerful current emanates from work in second language acquisition (SLA). ...However, TBLT has a second pedigree. ... A task-based approach has general educational relevance. (第二言語習得研究と一般教育学の流れを汲む) (Bygate 2015)
- CLT の時代にポスト・メソッドの考え方が完成している。従ってポスト CLT を議論したいなら、CLT を形成するどの原理が引き継がれ、どの原理が精緻化され、どの原理が放棄されたのかという議論をしなければならない。
- TBLT は CLT の言語観と教育観を引き継ぎ、SLA 研究により言語学習観がより強化されている。
- TBLT が目指すことは主に以下の 3 点：
  1. タスクをもとにコミュニケーション環境・対話空間を構築し、言語コミュニケーションを通して、物事の見方、考え方が深まる。
  2. そのような経験を通して、漸進的に言語の発達を促す。
  3. さらに、言語学習の仕方を同時に学ぶ。
- 従って TBLT は内容と言語を統合する試みで、CLIL の一形態であるといえる。さらに、タスク無しでコンテンツを学ぶことはできないので、CBI を追求しようとするとならば TBLT の手法が必要となるはずである。
- TBLT の実践における留意点：
  1. 学習者にとって関連性があり、興味をひきつけるようなタスクを考案できるのか。(学習者に寄り添ったタスクを考案できるか。)
  2. どうしてそのタスクが必要なのか。
  3. そのカリキュラムの中で、タスクがどのように使われるのか。
  4. タスクによって構築されたコミュニケーション環境において、即興的な言語的補助をどのように提供できるのか。
- 英国における応用言語学の言語教育における貢献は、原理に基づく言語教育実践の枠組みを提示したことである。
- その枠組みを用いて、言語教育学の枠組みも構成することができる。(百濟・西口 (印刷中) において日本語教育学の試案が提示される予定である。) その中で、CLT と応用言語学の発展と TBLT までの歴史をまとめる予定である。特に重要なのが、Capacity (言語技量) という Widdowson によって提示された考え方である。Communicative competence は母語話者の能力を参照している。Communicative

capacity という考え方は、たとえ非母語話者だとしても、その社会の成員となる言語使用者に創造性の可能性を残している。

- 最後に、教師教育の完成形は「言語教育関連領域の研究者でありながら、同時に言語教育に関心を寄せる」応用言語学者とのディスコース実践を行い、広く原理を引き出しながら言語教育の企画を行い、実践を通してその企画を更新続けられる人材を育成することではあるが、それまでに長い道のりがある。従ってまず教師が身に付けなければならないのが、“sense of plausibility” (Prabhu 1990)であり、そのような感覚を身に付けるために、実践研究を行う必要がある。実践研究は、実践者同士のディスコース実践であり、そのようなディスコース実践 (=研究) が日本語教育 (学) において重視されなければならないことである (百濟・西口 印刷中)。

注とお願い) TBLT 実践については、Facebook で紹介している

(<https://www.facebook.com/tblt.japanese.pedagogy/>)。百濟・西口 (印刷中) は、「リテラシーズ叢書ポスト・コミュニカティブアプローチ『コミュニケーション』とは何か? (仮題)」に掲載予定で、の論文情報についてもこの FB ページで周知の予定ですので、上記に示された点に関する引用は論文が出版されるまでしばらくご控えください。